

## ウィルシヤワー

陽南中学校 3年 李香

彼は私にこう言った。君がコッペンみたいだったから、つい。

「イイヨネエリカチャンハ。」

「ドウセツギノテストモユエーナンデシヨ。」

これらの言葉は私にとってはもはや一種の呪文だった。某ゲームで“ベマホ”と唱えればHPが回復するように“イイヨネ(以下略)”と聞こえた瞬間、私は困ったような笑みを浮かべて絶妙な角度で首を傾げる癖がついていた。私、渡辺江梨花はそんなに努力しなくても昔から勉強が人並み以上にできる子だった。だからこの手の返しは上手くできている・つもり。

「もおりカはいつも顔にでるんだからあ。」

突然教科書で頭を小突かれて振り返ると友達の藍川啓子がいた。私の事をリカと呼ぶこの親愛なる友人とは小学校以来の付き合いだ。啓子は他の子みたいな事は言わないし、なんだろう。この感じが居心地が良くていいことなのかもしれない。

「え、嘘。すっごいスマイルだったよ？私。」

「いやいや。笑ってる顔すっごい不細工だったから作り笑顔でしょう。あれ。」

「え、ちよつとどーゆー事ー？」

チャイムがなった。カラカラと笑いながら席に戻る啓子を見ながら啓子のこういうところがいいんだよね、なんてふと思ったりした。今日の数学は中間テスト返しだった。数学の竹丘先生が入ってきて、教壇にテストの束を置くと同時に

「はい。今回のテストの最高点は。ね。はい。100点です。」

といつも通りの口調で言った。“ドクン”私の血液が波打つ。きた。平然を装いながらみんなの会話に参加する。

「ダレダロウネ」(わたしだろうね。)

「江梨花ちゃんじゃない？」(当たり前)

それからテストが返されてさようならまでの時間はほんとに恐ろしく早かった。そして恐ろしく早いにその間の記憶がない私じゃなかった。違った。違った。じゃあ誰なの。ダレナノ。自分の中では繰り返し分らないふりをするしかなかった。でも分かっている。あの100点は誰がとったのか。私じゃないってみんなに分かったら。どうしよう、分かんない。口に言葉の大群が押し寄せてきて苦しくて仕方ない。熱すぎる太陽がまるで溶けているかのように見える。首筋に汗がつたるのを感じて水でも飲もうかと自販機を探した時。水が突然降ってきた。

雨じゃない。水が降ってきた。降ってきた方向をふと見るとホースを持った少年が青色の水を黙々と私に浴びせていた。

「い、いきなりなにすんのー?。」

驚きながらもなぜかそこから動けない私に彼はくっつくもない笑みを浮かべてこういった。

「乾いててかれそうなものには、水をあげるでしょう?君が給食のコップパンみだったからつゝ。」

「つゝ...。じゃない。」

気がつくとは私はその少年からホースをひたたくって走り出していた。後々考えるとあれは誰だったのかとか、なんで走り続けてもホースは切れなかったのかとか色々疑問しかなかったのだが、その時の私にそんな余裕はなかった。水で頭は冷やされたはずなのに。

「わっけわかんない。」

余裕だねって言われるの嫌いじゃなくせに。でもみんなから目立つのは嫌だとか意外とへたしなくせに。そのくせみんなにおいつかれるのはもっと嫌なくせに。

「めんどくさいんだよ!自分!。」

がむしゃらに走りながらホースの水を町中に撒き散らす。アスファルトに撒かれた水滴がキラキラ光ってまるで私が進む道を照らしてくれているみたいだった。道端や公園の草も水を浴びて生き生きと緑を濃くしていく。空に向けてとび跳ねた水滴はぼやけた太陽の輪郭を少しずつもどいていく。このまま私もはつきりしてしまえ。家族。友達。勉強。進路ぼやけて

無くなってしまうような私の輪郭をテストの結果一つで押しつぶされそうになる私の未完成な輪郭をどうか固めてやっってはくれないだろうか。息が切れて後ろを振り返ると私が通った道がはつきり分かった。

「つめたっ。ってか何でリカそんなにずぶ濡れなのー?」

私の事をリカと呼ぶのは一人しかない。

「あかさ。ケイコ。次のテストでは絶対負けないから。私、今すごい悔しいから。クラスの秀才キャラ取られたら困るんですけど。」

「のぞむところだよ。ってか叫んでる時のリカの顔すごい不細工なんだけど。」

「そういう啓子もひどいからねー!」

ホースの発射口を正面に向けると目の前にホースの発射口がみえた。同時に水が噴出して二人をさらに光らせた。二人分の想いを全身に浴びながら真ん丸な太陽を久しぶりに見たよ  
うな気がしていた。